

図書館の本棚から(一般)

2022年7・8月号 亀山市立図書館

テーマ：夏に読みたい、わたしの課題図書(仮)

●向日葵の咲かない夏 道尾秀介／著

夏休みを迎える終業式の日。先生に頼まれ、欠席した級友の家を訪れた。きい、きい。妙な音が聞こえる。S君は首を吊って死んでいた。衝撃もつかの間、彼の死体は忽然と消えてしまう。一週間後、S君はあるものに姿を変えて現れた。「僕は殺されたんだ」と訴えながら。

●少年たちの終わらない夜 鷺沢朋／著

終わりかけた僕らの10代最後の夏。愛すべき季節に別れの挨拶をつけ、駆けぬけてゆく少年たちの、愛のきらめき、透明なかげり。80年代末の“豊かさ”が照らし出す夜に、終わりはあるのか？ピュアでせつない青春のかけらたちをリリカルに描いた作品。

●TUGUMI 吉本ばなな／著

病弱で生意気な美少女つぐみ。彼女と育った海辺の小さな町へ帰省した夏、まだ淡い夜のはじまりに、つぐみと私は、ふるさとの最後のひと夏をとともにする少年に出会った。少女から大人へと移りゆく季節の、二度とかえらないきらめきを描く、切なく透明な物語。

●風待ちのひと 伊吹有喜／著

“心の風邪”で休職中の男と、家族を失った傷を抱える女。海辺の町で偶然出会った同い年のふたりは、39歳の夏を共に過ごすことに。心にさわやかな風が吹きぬける、愛と再生の物語。

●真夏の方程式 東野圭吾／著

夏休みを伯母一家が経営する旅館で過ごすことになった少年。仕事で訪れた湯川も、その宿に滞在することを決めた。翌朝、もう一人の宿泊客が変死体で見つかった。その男は定年退職した元警視庁の刑事だという。彼はなぜ、この美しい海を誇る町にやって来たのか…。これは事故か、殺人か。湯川が気づいてしまった真相とは一。

●すいかの匂い 江国香織／著

あの夏の記憶だけ、いつまでもおなじあかるさでそこにある。つい今しがたのことみたいに一。バニラアイスの木べらの味、ビニールプールのへりの感触、おはじきのたてる音、そしてすいかの匂い。無防備に出遭ってしまい、心に織りこまれてしまった事ども。おかげで困惑と痛みと自分の邪気を知り、私ひとりで、これは秘密、と思い決めた。11人の少女の、かけがえのない夏の記憶の物語。

●夏の体温 瀬尾まいこ／著

夏休み、小学三年生の瑛介は血小板数値の経過観察で一ヶ月以上入院している。退屈な病院での日々。そんなある日やって来たのが、陽気に挨拶する同学年の壮太だった。たちまち打ち解けた二人。でも一緒にいられるのは、あと少ししかない。出会いがもたらす奇跡を描いた作品集。

●夏への扉 ロバート・A・ハインライン／著

ぼくが飼っている猫のピートは、冬になるときまって夏への扉を探しはじめる。家にたくさんあるドアのどれかが夏に通じていると信じているのだ。1970年、なにもかもを失ったぼくは、飼い猫のピートと一緒に“夏への扉”を探しに行くことにした…。冷凍睡眠で30年後へと送りこまれたぼくは、失ったものを取り戻すことができるのか。

夏なので、自分に宿題を課してみました。がんばれ読書感想文。